

ロゴス文明の自壊とカオスの復権

—宇宙において万物は相互に結びついている— (エルヴィン・シュレーディンガー)

佐藤明雄

(1)

「世界は没落に近づいてゆく。現に在るのだからというたった一つの理由で、世界はこの先もまだ続くかもしれない。しかしその理由たるや世界は終わるといふ方の理由に比べて、なんと薄弱であることか。われわれは、それによって生きてると信じたものために破滅するのである。技術はわれわれをアメリカ化し、進歩は完全にわれわれの精神生活を萎縮させてしまうであろう。」

——ひとはこの文章を読んで、今日21世紀の現代に書かれた文明批評の一節であろうと思うかも知れない。しかしこれは、今から160年も前、ニーチェの「神の死の宣言」に先立つ約半世紀も前の1851年に著された『火箭』と題するボードレールの断想からの引用である。

それに先立つ1829年、ゲーテはある対話の中で、神はもはやこの世を喜び給わず、新しい創造のために一切を打ち砕かねばならない時代が来るであろうことを予言している。それ以後、フローベル、キルケゴール、ドストエフスキー、ニーチェ、トルストイなどの作家や思想家たちの眼にも、当時の西欧世界は、明らかに一つの針路—衰退と没落の過程にあると映じていた。そこには、かつての啓蒙時代のような進歩や発展の希望は完全に消え、世界には不安の暗雲がたれこめていた。例のムンクの有名な『叫び』と題された絵画(1893)は、まさにこのような当時の人々の心理を象徴したものであろう。

そしてまもなく世界は、戦争犠牲者6000万人という第二次世界大戦を体験し、わが国も、原子爆弾の、史上初めての被爆国となった。

このようにして1945年以降、われわれは核兵器使用の全面戦争を視野に、「人類の没落」とか「世界の破滅」といふ言葉を、もはや単なる比喩や象徴的意味においてではなく、現実の物理的、生物的意味で考えること

を余儀なくされたのである。

しかも、「原爆投下」という、あれだけの惨劇の元凶が誰であったのか65年を経た今日にいたるも未だ明らかではない。これは現代文明のもつ一つの特徴であり、「公害被害」の場合でも、公害の事実はあるけれども、その責任者不在の結果に終わることが多いことは、わが国の各種公害訴訟でも明らかどころである。

かくて広島平和公園の原爆慰霊碑に刻まれた碑文「安らかにお眠りください。過ちは繰り返しません」は、今も主語欠落のままに、加害者と被害者の間をさまよいつける。その証拠に、わが国は核兵器廃絶を誓いつつ、米国の核の傘を不可欠と考えるし、国際世界も「抑止力」と称する奇妙な呪文のもとに、全人類を数十回も殲滅して余るほどの核兵器の保存をやめることはない。「膨大な核兵器の製造と保有をするほど賢明ではあるが、それを使用するほど愚かではない」という論理であろうが、その賢と愚の差はいかほどか。人類はいつからこういう愚論を口にできるようになってしまったのであろうか。

(2)

人類の未来について、最も悲観的な予言をしたのは、他でもない新訳聖書の「黙示録」である。人々に愛と希望と復活の福音を伝えるべき聖書になぜ、悲惨な人類の最終戦争と滅亡の予言が加えられねばならなかったのか。それは何の警告を意味したのであるか。

カントも200年前、道徳性を欠く文明はいかに繁栄しようとも、それは「輝かしき悲惨」となることを警告したが、それは核兵器はおろか、大量破壊兵器の片鱗もなかった時代のことである。そして彼の予言どおり、200年後、輝かしき科学の粋ともいえる原子物理学は、文字通りの「悲惨」である原子爆弾を生む学問となった。カントにも、当時すでに、この文明の歩むべき運命が見えていたのだろうか。

それにしても、産業革命華やかな近代文明の黎明期の時代、鉄道、通信、情報、教育などの飛躍的發展を目の当たりにしていたボードレールや具眼の識者たちが、人類のばら色の未来を描いても不思議ではなかったあの時代に、なぜ、人類世界の将来について、かくも悲観的な予測を抱いたのであろうか。

ましてボードレールは、「われわれは、＜それによって生きていると信じたもの＞のために破滅する」と言う。その「われわれがそれによって生きていると信じたもの」とは何を意味するのであろうか。いわばそれは、学問知識であり、科学技術であり、法制度の充実であり、教育の普及であり、産業と経済商業の発展であり、民主主義による自由と人権の拡大などと理解してよいであろう。それは、西洋2000年におよぶ輝かしい「理性とロゴス文明の歴史」の成果であり、人類がその長い歴史において、進歩の目標とし、価値とし、精魂を尽くして、その到達と実現にむけて努力してきた人類文明の精華に他ならぬ。それが何ゆえに、人類滅亡の要因になるというのであろうか。

しかしこの悲観は、ひとりボードレールのみではない。20世紀現代の哲学者ベルクソンも、その著『道徳と宗教の二源泉』(1932)の結語において、いみじくも「人類はみずからの為した進歩の重荷の下に、半ば押しつぶされて呻吟しているのである。人類は自分の未来が自分自身に依存していることを十分に分かっていない。人類はなによりもまず、自分は生き続けることを欲するかどうかを、考えてみるべきである」と訴える。すなわち、彼は人類に対して、かの "to be or not to be" のハムレット的問いを、個人問題としてでなく、種としての人類全体の問いとして、自問すべきであると警告しているのである。

しかも興味深いことに、ベルクソンが、このような文明の危機回避のために期待するものは、理性の学や経験科学の更なる充実でもなければ、また、伝統的宗教への帰依や信仰の教化、社会倫理や道徳心の涵養といったことでもなく、まして経済生活の向上による社会の安定でもない。

それは意外にも、「心霊科学の研究」と、「生活の簡素化、単純化」という、二つのことである。しかもその二つは、彼においては連動した事柄でもある。彼によれば、生活の単純化、簡素化は、何よりも戦争の危機回避と平和のための必要条件である。平和は、国民の生活水準の向上や富裕によってもたらされるものではない。その逆に生活の複雑化、輻湊化こそが、生産と消費の増大と資源獲得の競争につながり、それが戦

争の危険を招く可能性を大きくするという。それでは、何ゆえの心霊科学の研究であるのか。

ベルクソンによれば、現代の物質文明の隆盛や、それに伴う生活の複雑化そのこと自体が、人々の飽くなき欲望と現世快樂への執着の結果であって、それは靈魂不死に対する懷疑と不信、いい換えれば、現世本位のニヒリズムに由来するものである。もし人が、科学的、合理的なる心霊研究によって靈魂不死の事実を知るに至れば、人びとの関心は必ずや、低次元なる欲望や享樂や過度の蓄財や奢侈の歡樂から転じて、おのずから単純にして簡素なる生活に満足し、そこに人生の真実の歓びを見出すことになる。一見唐突に思えた靈魂不死と生活簡素化の問題は、ベルクソンにとり、文明の危機回避のための不可欠な連動課題であった。

(3)

しかし、近代の学問科学も一般社会生活も、ベルクソンの期待とは全く逆の道を進んできた。学問は、「世界の一切の神秘と魔術からの解放」を標榜して自然科学、社会科学、人文科学ともに、唯物論科学の主導のもとに進歩を遂げる中で、かつては「生ける自然」と敬われた世界は、生命も知性も目的も持たない機械構造と理解されるようになる。また一般社会生活は、豊かな社会を目指して、生産の向上と消費の拡大にしのぎを削ることによりますます多忙かつ、複雑化し、その中に取り込まれた人間の労働と生活には、かつてのヨハン・シュトラウスの「鍛冶屋のポルカ」の喜びもなければ、ミレーの「晩鐘」に見る感謝の祈りもない。ただただ機械的労働に翻弄される人々の姿は、かのチャップリンの風刺映画『モダン・タイムズ』に明らかかなところである。

これら文明に対する悲観論を、単なるペシミストたちの、理由なき危惧と見過ごすことができるであろうか。われわれが見る現代世界の状況は、1968年結成の「ローマクラブ」をはじめ各界の有識者、各種シンクタンクの声明などにも見られるように、多くの面において、文明破局への限界に近づきつつあることは、だれの目にも明らかであろう。この文明は、もはや「制御不能」の状態に陥っていると断言しても過言ではない。

しかも事態の問題は、人びとの無知や努力の欠如などによって生まれたということではなく、ボードレールの言葉のとおり、われわれが、それを頼みにし、それを目指して叡智を傾けた科学技術や、教育の普及、経済や産業の発展や、民主政体や自由の拡大など、要

約すれば「ロゴス文明」への勤勉と努力の成果の結果である、という点にある。

以下、現代世界が抱える文明の危機の諸問題を列挙してみよう。

核兵器や大量破壊兵器の開発と拡散、世界の軍備費の増大、続発する戦争と地域紛争、絶えないテロの脅威、民族・部族間の対立、宗教・宗派間の紛争、原理主義の衝突、領土紛争、石油・天然資源の争奪、世界に跳梁するグローバル国際企業と大金融資本、金融破綻の恐怖、自然破壊と環境汚染、地球温暖化、世界的気候の変動、生態系の破壊、自然災害の巨大化、水資源の不足、飢饉と旱魃、失業、拡大する生活格差、15億人の絶対貧困、麻薬汚染、HIV、パンデミック疫病、人口の爆発、各レベルでのモラルの崩壊等々。

この人類文明がつくりあげた負の所産たる目録表は、数え上げればきりが無い。

それらの多くはボードレールやベルクソンの時代には、まだ存在もしなかったものであり、彼らのいう文明の破綻理由の視野にもなかったものばかりである。それらは、グローバル化された今日の世界では、連鎖的に一挙に世界に伝播し、文明の秩序を破滅させる類のものである。しかも問題は、これら負の事象の多くには、その源となる明確な元凶も悪人も存在しない、ということである。誰もが忠実勤勉に仕事をこなし、研究と生産に励み、信仰深く、平和を願って精励する、その結果がこの事態を生み出したということである。

となれば、問題の所在は個々の人間、組織、団体、国家、国際機関にあるのではなく、長く人類が信奉しつつも、今やその運転者を放り出して爆走する巨大マシーンのごとく、制御不能にまで至ったロゴス文明の本質そのものに帰す、と考えざるを得ない。

(4)

西洋における知識と学問は古代ギリシャに始まる。そしてその礎石となったものが、ソクラテスによる言葉の概念規定であり、新約聖書「ヨハネ伝」冒頭の句「はじめにLogosありき」であった。神話と伝説のChaos（混沌）と混迷に漂う古代世界にとって、この一句は人類の独立宣言のように唳々と響き渡る。Logosは、ふつう「言葉」と翻訳されているが、広くは理性、合理性、秩序など、人類文明の希望の星のごとく、西洋2000年におよぶ学問科学と文明を導くものとなった。

われわれの知識と文明は、「言葉」に始原をもつが、知識や学問に限らず、言葉は人間独自の所有であり、人間は唯一言葉を持つ動物である。ソクラテスによる概念規定や、「はじめにロゴス（言葉）ありき」の言葉中心の伝統は、人類共通のあらゆる民族の文化、思想の「基軸通貨」のごとくに時代を貫通する。20世紀の哲学者ハイデッガーは「言葉は存在の家であり、その住居に人間は住む」と言い、ヴィットゲンシュタインは「言葉の限界が世界の限界である」と言う。しかし、宇宙万物の「存在」は、わずか数百万語の言葉によって切り取られるほどに、狭小なものであるか。ここに第一の疑問が生じる。

たとえば、ソクラテスに酸素は在ったのか、と問うとき、「酸素」という言葉を持たなかったソクラテスには、酸素はなかったことになる。しかし彼が酸素呼吸により70年の生を保ちえた以上、酸素は在ったのである。ただ、人間はそのような言葉の与えられていない存在を、「存在」として認めないだけのことで、この言葉化されない存在、ロゴス化されない混沌を排除しようとする基本姿勢こそが、ロゴス文明の誤りの第一歩であった。

瞑想、座禅、ヨーガ、忘我の踊りや詠唱、薬草、薬物、酩酊などによる変性意識状態での没言語的、非ロゴス志向が、存在のより深いレベルに同化しうることを知る人びとは、遥かに少数で文明の主流になることはなかった。

次に現れたのが近代科学における「数式化」という新しい基軸通貨であった。

ガリレオの「自然は数式で書かれた一冊の書物である」との言葉どおり、ガリレオの試みは、自然現象をすべて数式化により解明することであった。そのガリレオを近代科学の確立に成功せしめたものは、かれの「実験的方法」という新しい手法である。それは、自然が発する自由発言を封じて、実験者によって予め策定された法則を裏付けるデータのみを、自然から証言させる、いわゆる「裁判官」の立場での尋問方法、それが「実験的方法」というものであった。当然、その法則を裏付けない変則データは廃棄されるか、隠蔽されるしかない。近代科学は、このように確実な数式による実証的方法によって、「学」として成立することに成功したのであるが、それはまさしく、フッサールの言葉どおり、「ガリレオは法則の発見の天才であるとともに、同時に自然そのものを数式の衣によって隠した隠蔽の天才でもあった」のである。

その極は、量子物理学者A. エディントンの、「物

理学にとって実在とされるものは、なにものも存在しない。自分の妻さえ例外ではなく、彼女の実態は微分方程式以外の何者でもない」と述懐する言葉に表されている。生きた生身の人間も、美しい自然も完全見事に、微分方程式の衣によって隠蔽、消去されてしまったのである。微分方程式のみが存在のリアリティを保証するものであるとしたら、日常に動き、料理をし、愛し合う妻はどういう存在なのだろうか。物理学とは、なんと悲しいことをする学問であることか。

しかし、その物理学者も実験室を出て家庭に帰り、「科学者」から「人間」に戻った時、彼を迎える「微分方程式」ではない、愛する妻に出会えて心の安らぎを得るはずである。

しかし、少なくともガリレオにとって、自然の数式化は、あくまでも自然理解のための「有効な一つの方法」との考えでしかなかったはずである。しかし、それを後世の科学者たちが、これを「唯一絶対の方法」と誤解してしまったこと、そこに科学の傲慢と文明の不幸が始まったといえよう。

次いで数式化された自然は、デカルト、ニュートン、ベーコンらによって、生命も心も意味も目的も一切持たない機械的構造体と考えられるようになり、そのような理解は当然、その中に生きる人間存在にも妥当することになる。ラ・メトリーの著書名『人間機械論』(1748)が示すように、人間は精巧にできた自動機械であり、没倫理的存在に過ぎないものとなった。

このようにして、言葉と数式、方程式と自然法則によって「切り取られた自然世界」も、その中に生きる人間存在も、すべては冷たい原子の集合体であり、精巧な自動機械に過ぎず、そのような存在について、存在の意味や目的や価値をかんがえること自体、無意味になるのは当然の成り行きである。それよりも考えるべき課題は、「自然から取り出した知識」の人間のための利用方法であった。

ベーコンはこれを「知は力なり」(Scientia est potentia)のモットーのもとに、あらゆる知識は、技術化され、産業化され、商業化されるとした(現代では「軍需化」も加えられる)。現代の知識と技術事情を見ると、400年も前の時代に現代を予言したかのごとき、ベーコンの洞察には驚嘆のほかはない。それと同時に、自然が命も心も意味も持たない機械的存在となれば、そういう自然は、もはや畏敬や尊重の対象ではなく、飽くなき人間の欲望充足のための、征服と篡奪と利用の対象となるだけである。現代人類による自然破壊の許可書は、すでに400年前に発行されてい

たのである。

世界が意味や目的を失ったならば、ひとは手段である技術を新たな目的として、その完成に励む。それは言葉であれ、数式であれ、技術であれ、自由であれ、金銭であれ、ロゴス文明の際立った特徴であり、そこには主従逆転の構図が生まれるのである。

(5)

このようなデカルト、ニュートンの数学的、機械論的自然観と人間観の思想が、国家社会に反映されるとどうなるか。その典型をわれわれは、ホッブスの国家社会観に見ることができる。

ベーコンと同時代人のホッブスの描いた人間と国家社会の実像を見ると、彼の著書『リバイアサン(巨大怪獣)』(1651)の名のとおり、人間社会は「万人の万人に対する闘争」の場であり、「人は人に対して狼である」という、弱肉強食の世界である。彼は、そのような自然状態を法制社会に変えてこそ、人々の安寧なる生活が保証されることを説いて、国家至上主義的な社会契約説を説いたのであるが、その基礎にあるものはあくまでも、唯物論的、機械的人間観であった。そこにはもはや、愛と信仰の教会社会もなければ、善意と奉仕の倫理社会もない。ただただ弱肉強食の自然状態から身を守るための、専制君主へ絶対服従の法制社会があるだけである。ホッブスの説く国家は恐竜以上に凶悪なのである。

このように、ロゴスの科学と哲学が相寄り寄り組み立てていった自然観、人間観、社会観は、伝統的キリスト教信仰とも、倫理社会の価値観ともおよそほど遠い、荒涼索漠とした世界を描くものであった。それでもなお、一般庶民の意識や生活は、かかる科学や哲学思想からは距離をおき、キリスト教の信仰のもとに、質素と勤勉と謙虚を美徳として、慎ましい生活を営んでいたであろう。

そこに現れたのが経済学という、生活直結の新しい学問による「資本主義」の出現であった。資本主義は、元来倫理学者であったA. スミスの創案によるが、それは驚くべきことに、人間の経済活動における「利己心」の肯定から始まったのである。自己愛や利己心は人間の持つ本性ではあるが、愛や隣人愛を説くキリスト教倫理の西欧社会では、決して認められぬ悪徳とされてきた。利己心は、カントがこれを「根源悪」とさえ呼ぶほどのものであり、かの「高利の金貸しシャイロック」が、シェークスピアの『ベニスの商人』によっ

て、悪徳の権化として描かれたことは周知のとおりである。

しかしA. スミスはこの封印を解いて、利己心こそが、社会の経済活動の牽引力になるもの、国家社会全体の経済発展に裨益する起爆剤であると考えた。市場で商人が他よりも、より良い商品をより安く売るのは、客への利他心からでもなければ、奉仕の精神からでもなく、私利を求める利己心からでよい。しかも競って他よりもより良い商品を、より安価で提供しようとする競争により、社会全体の経済活動は活発化し、発展する。この「私悪は公益なり」との論理により、利己心は、スミスによって悪徳のパンドラの箱から解放され、「学」の名のもとに公認され、堂々と社会と経済の推進力として躍りでることになった。すなわち資本主義と自由競争の始まりである。かくて、悪徳とされた利己心の封印が解かれ、大手を振って大道を闊歩する論理は、「世界のシャイロック化」を招くことになり、その結果がどうであるか、今日われわれが見るとおりである。

この資本の論理と自由競争の原理によって、西洋世界が飛躍的に発展したことは、否みえない事実である。手工業時代を経て、生産能力が飛躍的に向上した産業革命を迎えると、その効果はいっそう顕著に現れ、国内では資本家と無産労働者の間に対立と格差を生み、果ては、植民地争奪をめぐる国家間の戦争へと発展していくこととなる。

一方、この自由競争が生む格差に対して、もう一つの人間の理想と権利である「平等」の立場から、経済理論を建てたのが、マルクス・エンゲルスの社会主義であった。「自由」をもとに資本主義が生まれ、「平等」をもとに社会主義が生まれたわけであるが、人類のもう一つの理想である「博愛」を、宗教と倫理の問題にとどめ、これを政治的・経済的原理として体系化する知恵を持たなかったこと、それが人類最大の不幸であったと言えよう。

因みに格差に関して言えば、スミスとてこれを憂慮しなかったわけではない。ただ彼が期待した格差の対策は「トリクルダウン効果」という、富の貧者への浸透効果であった。財貨の蓄積が過剰になり、富者の欲望が満たされれば、おのずと蓄積は止まり、財貨の分配が貧者にも及ぶ、という考えであるが、この処方は明らかに間違っていた。古代ローマの貴族や富者は、宴会の料理で胃を満腹にしては、これを吐き戻してさらに飲み食い続けたが、富者の蓄財は、富者自身の自然な欲望とも使用目的とも関係がない。ただ資本の

論理にしたがって、機械的な自己増殖を続けるものであることに、さすがのスミスの読みも甘く、その知恵は人類の狡猾さに及ばなかったと言えよう。

このように、いったん公認され開放された利己心には、もはや制御は効かない。資本の論理がアナログ的な実体経済における産業資本においてはまだしも、バーチャルな様相の金融工学的メカニズムの中におかれた金融資本に関しては、近年の通信革命、情報処理のデジタル化を受けて、巨大な資金が24時間、瞬時のうちに全世界を駆け巡る。精緻な数学理論によってつくられた「デリバティブ」と呼ばれる投機的な金融商品は、2兆ドルを超すといわれるが、金融市場はまさに巨大なカジノと化し、これはいかなる政府も、組織や団体も、法律も介入を許さない弱肉強食の修羅場である。世界の貿易決済に支払われる総額5兆ドルに対し、500兆ドルの巨額のマネーゲームのための資金が跳梁する。世界で最も豊かな数百人の総資産は1兆ドル、これは世界人口の40%に相当し、最も貧しい人びと25億人の年間総収入に匹敵する。

しかも、現代の富者は血に飢えた狼たちではない。個々人は信仰深く、慈善事業に熱心で貧者に同情深い善人たちである。ただ彼らが、ロゴス文明の生み出した法外な金融システムの時代に生きて、その合理的、合法的恩恵に浴しているというだけであるが、彼ら自身、手段である金銭に仕える忠実な従者、いや奴隷であり、ロゴス文明の被害者でもある。

(6)

次いで西欧のキリスト教社会に大きな衝撃を与えたのが、19世紀のダーウインの進化論であった。人類の誕生についての、聖書の記載を真っ向から覆す進化論の打撃は、多くの知識人を戸惑わせ、もはやキリスト教的世界観と価値観の維持は困難となり、その告白がニーチェの「神は死んだ」のニヒリズム宣言となる。

しかし、この最適者存続の「最強者たれ、しからずんば死ね」と言わんばかりの理論は、自然界のみならず社会にも妥当する原理として、弱肉強食の資本主義理論を裏から支える役割を果たしたが、その意識はそのまま、科学・技術の世界にも妥当する。近年のスーパーコンピューターの予算を巡る科学者の「絶対に一番でなければ、二番ではダメなのだ!」という、「最強者以外は死を意味する」と言わんばかりの言葉にも表されている。

さらにそれは、「社会的ダーウインニズム」として、

人種的適者/不適者に応用するヒトラー・ナチスのイデオロギーに採用されて、彼らが劣等とみなす他民族の支配と抹殺（ホロコースト）への大義を与えることにもなった。

自由競争の結果に生じた格差によって、今日の第三世界では1年間に、第二次世界大戦の6年間の死者数とほぼ同じ数の6000万人が、貧困と食糧、水、医薬品の不足で命を失っているが、この形を変えた「ホロコースト」を看過するわれわれの中にも、社会的ダーウイニズムがないと言えるであろうか。

さらに心理学においては、フロイドは人間の心理と行動の基本的要素が、すべて「リビド」と称する性衝動と欲望のエネルギーに発すると説くことで、こころの領域においても、宗教的・倫理的要素は抹殺され、機械論的文明観を補強する思考が侵入することになる。

こうした状況の中で、理性と合理性主導のロゴス思考の危険性に異を唱えたのが、実存主義の祖、キルケゴールであった。彼はヘーゲルの汎理性主義に反対し、真理の普遍妥当性や客観性を否定して、真理は自己の主体性にあると主張し、個の実存に価値をおくことを説いたが、それも所詮は孤独な主体性の一人舞台に終わる。

その思想は20世紀になり、サルトルにより「実存は本質に先立つ」と定式化された。

これに伴って人間の先天的な本質や価値は否定され、人間は何者によっても規定されず、拘束もされない「自由そのもの」、零点のような存在となった。人間は言葉をもつ、肉体をもつ、知性をもつように、人間の属性の一つとして、自由を持つのではない。自由の意味は極大化され、「人間であること」と「自由であること」とは、全く同義になる。人は言葉を捨てても、理性を捨てても人間であることは残るが、自由を捨てることは、即、人間であることを否定することを意味する。この状況をサルトルはいみじくも、「人間は自由に処刑されている」と表現したが、それはある意味で自由への完全奴隷化である。人間と自由に関して、主従の関係がここでは逆転してしまったのである。

すなわち自由は技術や知識や金銭と同様に、元来は人間の目的達成のための手段であった。それが世界の意味喪失、人間の目的喪失とともに、手段それ自体を目的化することによって、主人たる人間が、従者たる自由や技術のしもべとなり奴隷となったのである。この主従逆転の構図は、ロゴス文明の多くの局面において、われわれが目にする光景である。

レバノンの詩人カール・ジブランの声を聞こう。

「私は見た。あなた方が町の門のそばや家の炉辺で、あなた方の言う自由とかの前にひれ伏してそれを拝むのを。まるで奴隷が、その身を裂かれても、なお暴君を称えてやまぬように。私は見た。一番自由なはずのものがいわゆる自由を、ちょうど軛か足枷のように、身にまとっているのを」『預言者』

さて、民主主義とは、このように普遍的価値の否定の上に、いわばニヒリズムの落し子として生まれた政治制度であり、ただ「多数」のみを価値評価の基準とする、極めて安易かつ怠惰なる機械的政治制度である。民主主義は、選挙民が神のごとき知識と判断を有する「理想人」であるかのごとき、いわば幻想の上に建てられた政治制度であるが、これを理想の政治制度と誤解する大衆が、繰り返される愚政に業を煮やして、ついに独裁者を選ぶ例はヒトラーのみではない。「俺が国民に強いたのではない。国民が俺を選んだのだ！」という独裁者ヒトラーの叫びは、民主主義そのものの自己怨嗟の声と聞こえるのである。

プラトンが民主主義を、「最悪の欲望の奴隷主義」と評し、マルクスやエンゲルスが封建制度を打倒したフランスやアメリカの民主主義について「それは利己主義の解放であり、社会に分裂をもたらす欲望の自由化であり、封建制にもまして隷属的な体制、ありうる限りの最悪の奴隷制である」と、プラトン以上の厳しい批判をしたことは、極めて興味深い。

そして現代、世界最大の民主主義国家を自他ともに認めるアメリカは、原子爆弾行使の唯一の国であり、世界の総軍事費の4分に1に相当する60兆円を背景に、全世界に700か所を超す基地を保有する、世界最強の覇権国家である。民主体制が世界の規範となることが求められるが、世界のすべてが、かくなることが理想なのであるか。

(7)

さて以上、ロゴス文明を創った学問と科学と思想の系譜を概観してきたが、その経過をひとはどのように見たであろうか。それは華麗な機械文明と精緻な論理体系の成果である一方、紛うかたなく、ニヒリズムの深化と拡大の歴史であった。

その事情を、M. ウェーバーは晩年の講演『職業としての学問』（1919）において、つぎのように総括した。概念と数式と合理的実験のもとに発展した学問と科学の最大の功績は、「世界の神秘と魔法からの解放」ということであった。そのことは学問が、古来人々が求

めた、神の存在の有無、この世界の意味、人生の目的とか、いかに生きるべきか、などの宗教的、倫理的問題には、一切答えるものではない、ということの明確な回答であった。今日、科学者のなかにも見られる、自然の中に神の摂理を見出そうとする「大きな子供たち」に対して、学問のなすべき仕事があるとすれば、彼らに、学問が神とは全く無縁なものであることを教え諭すことである。かつて人々の尊重した愛や、善意や、信仰や希望など、もろもろの崇高なる価値は、すべて公の舞台から引き退り、僅かに神秘的生活の隠れ家か、個人の交わりのなかにその姿を残すだけである。そしてそれが主知化と合理化によって、世界を魔法から解放しようとした時代の宿命である、とウエーバーは説く。その舌鋒は仮借なく、神信仰や人類愛や善意、また、人生の意味と価値を、知識と科学にもとめることの無意味さを徹底強調し、その語調はあたかも「一切の希望をすてよ」というがごとくに厳しい。このニヒリズム新宣言こそ、西洋2000年のロゴス的知識と科学と文明の総括であったのである。

われわれはかつて、混沌の闇にロゴスの光を当て、言葉と数式と法則により、茫漠たる存在の全体を分割、分離し、切り取り、これに秩序を与え整理することをもって、知識、学問科学の使命であり、また文明であると考えてきた。そしてその文明の成果によって、人類が享受した恩恵と利便の数々は計り知れず、われわれは素朴に文明の進歩が人類の幸福につながることを信じて疑わなかったのである。

しかし一方、人類の生活に秩序と安寧どころか混乱と闘争を与え、核兵器や多くの戦争を生み、自然環境を破壊し、人類の未来に大きな危惧と不安を与えているのも、また同じ文明の所業なのである。その反省から、改めてわれわれが長く信奉してやまなかったロゴス文明の名に連なる、知識や科学技術、学問の系譜を顧みて精査吟味を試みたが、それらに共通したことは上に見たとおり、神を蔑し、生ける自然から生命と精霊を奪い、人間と社会を自動機械とその工場と化し、社会を弱肉強食の修羅場に変え、悪徳と物欲を美德と讃え、自らを自由という名の牢獄に閉じ込めて得々とするのでしかなかった。そして、それらすべては、人類の意に反しつつも、ロゴス文明自壊のプログラムに従うものとなっていることは、今日の世界が示す通りである。

ロゴス文明の歴史は、このようにニヒリズムの深化と拡大の歴史であったが、人々は文明の放つ光輝に幻惑されて、あたかも笛吹ハーメルンの子供たちのごと

く、嬉々としてその深淵へと導かれていったし、そして今も、この文明のたどりつつある運命に気づくことなく、精々「持続可能な世界」の模索を続ける状況にある。

(8)

莊子によると、古代中国のある国に「混沌王」が統治する国があった。王はある時、隣国二人の王を招いて歓待をした。後日、二人の王はその歓待に感謝して、返礼を相談したが、混沌王の顔にも人間らしい目鼻や口を贈ることにした。6日かけて眼、鼻、耳の穴を開け、7日目に口をつけたとき、王は死んだ。混沌王が、感覚器官というロゴスの秩序を与えられたとき死んだという、この故事の示唆するところは深い。これはまさしく、ロゴス好みのわれわれ人類が、大いなる存在と、自然に為してきたことその事ではないだろうか。

われわれは自然の理解のために、秩序と称して、言葉と数式と方程式と法則などの諸道具を駆使して、これを分離し、分断し、区別し、切り刻み、勝手な造作を加え、その挙句に、偉大なる自然・混沌王を殺してしまった。人類が今、文明の危機という形で受けているのはそのことの報いではないだろうか。

われわれ人間にとっては、負の意味でしか受け入れられない「混沌」であるが、地球上、ロゴス文明と無縁に生きる動植物や虫も鳥も魚も、木も花も草も、すべては人間から見れば「混沌」の中にあるはずだ。しかし、その生き方は美しく、秩序と調和を保ち、イエスが「野の花を見よ、空の鳥を見よ」と説いたほどである。聖書は、禁断の知の木の実(ロゴス)を食べた咎で、アダムとイブが楽園を追放されたことを記すが、楽園こそは、混沌の桃源郷であったのかもしれない。そういう楽園を追われた人類にとって、ロゴスは苦難の十字架でこそあれ、誇るべき榮譽でも黄金の冠でもなかったはずである。

アフリカのサバンナで繰り広げられるライオンと縞馬の闘争を、ひとは弱肉強食の残酷な光景と見るかもしれない。しかし、そこにあるのは自然の摂理に則った、肉食動物の過不足なき、自然なる生態である。親子で飢えを満たしたライオンは、残った獲物をハイエナに譲り、ハイエナは禿げたかに譲り、残りはさらに小動物たちや植物の栄養源となる。そこにはA.スミスが期待した、見事な「トリクルダウン」が成立しているのである。

また、人は恐竜の時代を恐怖でもって語るが、人類

が誕生して数万年、近代文明僅か500年にして、すでに自己の存続を自ら危うくしているのに比べると、恐竜の歴史が、1億5000万年も続いたことは、驚異と敬意に値することではないだろうか。

謙虚なるカントは、認識の対象を経験世界に限定し、その背後の「叡智体」と彼が呼ぶ「物自体」については、不可知なるものとして、これに立ち入ることを理性の越権行為として戒めた。あえて物自体を「混沌」のままに置こうとしたカントの自制こそ、真の知恵ではなかったか。量子論によれば、物質の究極の単位である量子は、同時に取りうるすべての状態を「潜在的な、重ね合わさった状態で持つ」といわれるが、いわばこの混沌状態こそが、世界本来の姿なのであるまいか。

しかし、物理学者にとって、混沌は求むべき実在、議論に値する存在ではない。その混沌に「観測」や「測定」を無理やり挿し入れることにより、混沌の「波動関数が崩壊」して、彼らの納得する「実在」となる。世にいう「観測者効果」observer effectであるが、それでは、観測者、すなわち、われわれ人類の現れるまでの宇宙や世界は、いったい何者であったというのだろうか。観測し測定し、微分方程式によって、物理学者が把握できる実在性と、そのようなロゴス一切を超越した混沌と、どちらが真の実在といえようか。

近代の知性が「混沌」と蔑視してきたものは、古代の叡智が「無」と呼び、「空」と呼び、インドの神秘家たちが「虚空」とか、「アーカーシャ」と呼び、カントが「物自体」と呼び、D. ボームが「暗在系」と呼び、ハイデッガーがSeinと呼び、現代の量子物理学が「量子真空」と呼ぶものであろう。量子物理学は、「宇宙において万物はすべて、相互に結ばれている」というが、その結びの役を果たす「非局在的量子ネット」も、人間にとっては混沌に過ぎないであろう。

天界の星たちを、その軌道の上に正確に公転させるのも、渡り鳥を数千キロの目的地にみちびくのも、鯨たちが故郷の川に戻るのも、動物たちに（人間を含め）自然災害を事前に知らせるのも、人間の持つ予知やテレパシーや祈りに働くのも、ユングの「共時性」と呼ぶ偶然の一致が起こるのも、すべては時空を超え宇宙全体に広がって働く、この「量子ネット」によるのであろう。世に「愛」というものがあるならば、これをこそ「愛」と呼ぶにふさわしく、愛は人間を超え、万物を結び包む宇宙そのものの原理と言えよう。

そしてその愛は、分離、分断され、孤立化して、進

むべき方向を見失ってしまったわれわれロゴス文明に、再び、万物相互結合の「全一性」の輪に戻ることを呼びかけ、促しているのではないだろうか。

(9)

われわれは今、文明自壊の危機の只中にある。しかも、人類が万物霊長の証しと信じたロゴス思考が生んだ科学知識と文明にその原因があると指摘してきたが、その主たる過誤とは一体なにであったのか。

まず、人間に与えられた心的能力は理性のほか、感覚、感情、想像力、記憶力、意志、意識、無意識など多彩であるが、ロゴス思考は合理性と計量性を中心に理性と知性を優先採用し、それ以外の器官のもたらす情報と知識を無視したこと。そして、それは言葉と数式にみられるように、「分離」と「分断」と「切り取り」になり、その成果が、デカルト・ニュートンの物質観、機械論的自然観、人間観、社会観に取り込まれたこと。さらにその機械論的で虚無的な世界観を、他の社会科学、人文科学、経済学、進化論、心理学などの諸学にまで拡大し、その結果、人びとの心の中のニヒリズムの深化と拡大に力を貸したことである。すなわち、ロゴス文明全体が偏狭な唯物論科学の枠内に閉じ込められたまま、これを是正する新しい科学的パラダイムを見出し得なかったことである。

しかしわれわれはここで、20世紀の初頭、かかる虚無的な世界観を生むもととなった、ニュートン物理学とは全く異質な、新しい知見を提供する科学のあったことを思い出したい。それが量子物理学である。

物質概念は20世紀初頭、ラザフォードによる原子核の分解によって、すべての存在が、それ以上分割できない最小の単位である「質点」から組み立てられているとする、ニュートンの基本観念が否定された。同時にそれは、従来の自然科学全体の基礎が、根底からゆすぶられるという、さらに重要なことを意味していたのである。

物質はすでに固体からエネルギーに替わり、そのエネルギーの塊である量子は、粒子であると同時に波動でもある、という奇妙な二重の性質をあわせもつことがわかった。これは素粒子が、物質的素材であるとともに、心的素材でもあることを示唆するもので、それは科学の新しい革命を意味する極めて重要な発見であった。

また、原子内の世界では、古典物理学の鉄則であった、因果律と時間・空間の制約は通用せず、素粒子は、

関係する複数の個所に、同時に存在することも明らかになった。さらに量子の働きには、無機物質にはない自発的な選択能力や、いったん同じ系にあった粒子どうしは、その後、永遠に近い時間を隔てようとも、また、宇宙的距離の遠くに離されようとも、永久かつ瞬時の結びつきを保ち続ける、という性質のあることもわかった。また、観測や測定によって一方の粒子がある状態を選択すると、他の一方の粒子は、最初の粒子の選択に対して、常に相補的な状態を選択するという、ある種の自発性、社会性が見られることなど、従来の物質概念には全く考えられない性質のあることも明らかにされた。

意外にも「冷たい原子」と教えられた物質の素粒子に秘められた、温かい人間性である。遠く離れた素粒子どうしが、どのようにして瞬時に、相手の素粒子の変化を知り得るのか。

「非局在性」と呼ばれる、素粒子のこれらの性質と作用は、あたかも人間の「心」や「愛」の原型を示しているかのようであるまいか。いったん結ばれた絆を、永遠に、何百光年の距離を越えても忘れずに保ち続けるという、素粒子のロマンよ！

打算や利害もなく、支えあう素粒子同士の相補性を、われわれが「協力」や「互助」という社会性の範型として学んだのであろうか。生命も心も愛も持たない無機物質が、偶然の進化やランダムな原子の配列の過程において、このような「ここに似た働き」を生んだ、と考えられるのであろうか。それよりも、われわれの脳細胞も肉体も、その組成が素粒子である以上、そこに素粒子の「ここに似た働き」を写しとったとしても不思議ではないのではないか。それ以外に、われわれ自身でさえ、自らの内なる心や愛や善意の出自を知る術を持たないのであるから。

われわれは長く、母の写し絵を心に秘めて、広漠たる宇宙の暗闇を孤児のごとくさ迷い続けた。そして今、おのが出自を示す母なる素粒子に、やっとなぐり合えたのであろうか。慕わしき御身、わが母なる素粒子よ！
汝のみ胸に疲れ果てし我を抱き締めたまえ！

荒涼たる虚無に慄くひと心に、ふと、このような思いを抱かせる素粒子論ではある。

われわれは、古来「ころ」や「愛」や「善意」を、心の事実として生きてきたが、近代の機械論的科学は、実証性や再現性という浅薄な知識を盾に、それらはすべて脳内の神経細胞の生む「物質的所産」と解することを強いてきた。それは冷たい原子の偶然の配列と作

用の所産に過ぎず、すべては個人の死とともに消滅するもの、また文明自体も、いつかは太陽の熱死とともに無に帰する運命にあるという。そしてそういう虚無的な世界観に対して、人はこれを論破しうるなんらの科学的根拠を持たず、無情なるニヒリズムの軍門に伏し続けるほかに道はなかったのである。

そして登場した量子論には、従来の科学思想に新しい革命をもたらす程の斬新さが見られたのであるが、それが世に新しい世界観として注目されるには、なおしばらくの歳月が必要であった。それは、量子理論が、あくまでも原子内部の極微視の物理世界に限られ、巨視的な自然や生物世界、人間存在とは無縁のことと理解されていたからである。

しかし、近年の量子物理学をはじめとする、宇宙論、生命論、進化論、意識論などの新しい研究成果は、量子論の非局在的相互作用が、原子内のみならず、生命体や宇宙そのものにも広く通用することを明らかにしつつある。その新しい科学的知見は、科学によって奪われた希望を再び、科学によって回復する道を与えてくれているようである。

(10)

新しい科学の基本テーマは、量子論の重要な真理、「宇宙においてはあらゆるものが相互結合>している」ということである。人体の全細胞は、一個の受精卵の分裂によって形成されたことを考えると、全細胞の相互結合は合理的であるように、宇宙は、万物が凝縮された一点のビッグバンより生まれたこと、そして万物の組成が素粒子によることを思えば、宇宙万物の相互結合もまた、十分に納得できることである。

もしこの理論が正しいとなれば、ガリレオ以来「法則の衣」によって隠蔽され、“非科学的”と無視されてきた、テレパシー、ESP、以心伝心、遠隔治療、共感呪術、祈りの効用、心霊治療、プラシーボ、シンクロニシティ、集合的無意識などなど、さらには臨死体験、体外離脱、前世記憶、死後のコミュニケーション、といった数多くの超常事象が、一挙に新しい科学の知見によって解明されることになるかも知れない。

身近な例では、日常われわれが体験する「偶然の一致」があり、また、嘘発見器をつけられたペットや植物が、その飼い主とさまざまな遠隔交流をする実験がある。外出中の持ち主の感情の起伏に、留守中のペットや植物が忠実に同調する。それはすりつぶされた葉っぱでもシャーレに採取された持ち主の白血球でも同

じである。また、別室に置かれた植物の葉っぱが傷つけられる瞬間に、機器が激しく反応したり、排水溝に熱湯が流されたときには、その中の細菌の受けるダメージに同情したかのごとく、激しい反応を示す報告があるが、共感や同情や惻隱の情も、人間だけのものではないようである。また、時空も因果関係も無視して起こる「シンクロニシティ」現象など、その発生メカニズムの裏には、万物の相互結合の前提が有力な論拠になるであろう。ユングが「集合的無意識」と表現したのも、かかる宇宙をつなぐ量子論ネットであったのかもしれない。

このように、極めて魅力的な量子論でありながら、上述のように量子理論が原子内部の極微視の世界に限られるとする頑固な考えにより、巨視的な自然や生物世界全体にまで、その視野を拡大して考えるまで、さらに数十年を要したことは、物理学のみならず、その間の急激な文明の劣化を考えれば、文明自体にも大きなロスタイムであったと言えよう。

確かに人体のような生物の構造は機械的であり、その生体は、物理的・生化学的な作用と機序で働いていることは事実である。しかしその一方、60兆個の細胞が、毎日24時間のあらゆる瞬間に、6000億個の細胞の新陳代謝を行い、毎時2億個の赤血球と抗体の合成や再生を行い、その他無数の生化学反応が生体の内部で瞬時的、かつ同調的に行なわれるためには、各器管と細胞、分子、遺伝子との間に、また生命体全体との間に、何らかの相互結合がなければならず、そこに、物理・生化学的反応以外に、量子論的プロセスの働きがあると、考えられる理由がある。

まして大脳の機能に関してはより顕著である。感覚、判断、推量、記憶、想起、予測など、環境外部から入る膨大な情報の受容と、その選択と発信の瞬時の対応は、複雑多岐にのぼり、その機能の円滑な実行のためには、物理的・生化学的プロセスが持つ秒速20メートルを超えることのない、電気的神経運動の到底対応できるところではない。脳にも巨視的量子論のプロセスが不可欠と考えられる。

また、人が一生の間に蓄える長期記憶は、 2.8×10 の20乗ビットという膨大な量であるが、それは果して脳の海馬という小さい記憶領野に対応できることであろうか。パソコンの機器本体が破壊され、記録が消滅した後も、フロッピーやCDに保存された記憶は必要に応じて再生されるように、われわれの記憶情報は、死後も（認知症はじめ何らかの記憶喪失を含め）、そ

のようなある種の量子論的な「記憶貯蔵システム」の中に保存されているのかもしれない。臨死の人間にしばしば「フラッシュバック」と称して、一生の記憶が走馬灯のように回想される現象が起こるが、生涯の膨大な記憶情報が保存されている証拠である。前世記憶や転生体験などの証言は、本人ないし他人による、こうした記憶貯蔵媒体へのアクセスの結果と考えられないだろうか。異色の哲学者アーヴイン・ラズロは、この記憶貯蔵媒体を、大胆にも古代インドが「アーカーシア」と呼び、現代科学が「量子真空」と呼ぶゼロ・ポイント・フィールドに求めるが、その事については、詳論の余地がない。

現代の脳科学によれば、記憶を含めて、われわれが「心」や「意識」と呼ぶ現象は、大脳のニューロンとシナプスの複雑な神経作用の物質的所産であり、それは死によって生ずる脳細胞のたんぱく質の分解とともに、一切消滅して無に帰するとされ、それが現代人の大方の科学的常識となっている。

しかし死後の、脳細胞分解のプロセスを、なにもたんぱく質の分解で止める理由はない。分解されたたんぱく質は物質である以上、組成的にはさらに高分子、分子、原子、電子、陽子へと還元され、最後には素粒子にまでいたるはずである。そしてその素粒子の本質が、文字どおり不生不滅であり、かつ心的と物的の両方の性質を合わせ持つとすれば、心と魂の形で働いた素粒子が生前の記憶情報を、量子論的記憶媒体のなかに、新たな波動関数として持ち続けることは、考えられないことではない。

しかも素粒子には、上記のように、人間の心に相通ずる働きがあるとすれば、バルクソンのいう心霊現象や霊魂不死の解明に、科学の光が見えたともいえよう。

(1 1)

さて、ニヒリズム克服の問題は、最後に神の存在問題につながる。しかし量子論の時代に、伝統的宗教の説く神の観念は、本稿の対象ではない。議論の端緒を、宇宙が生まれた137億年前のビッグバンにおかざるを得ない。

古来いろいろな神の存在証明がこころみられたが、それらはすべて失敗に終わった。それはあたかも重力場の「実体」を証明するかの試みであったからである。われわれは、物体の落下を見て、重力の「働き」を知るが、それを可能ならしめている重力場そのものを観測することはできない。電磁場であれ、原子核内の「強

い核力]、「弱い核力」であれ、場そのものは、不可知の領域にとどまるように、神も同じく、その「働き」を知ることは出来ても、実体と存在に関しては不可知である。

神や重力を例に出すまでもなく、われわれの「心」を例にとっても同様、心がつくり出した言葉を聞き、行為を見ることはできるが、「心そのもの」は聞くことも、見ることもできない。心の働きを観察し記述はできるが、心そのものはその対象になり得ない。心の存在証明ができないという理由から、心を否定することはできない。なぜならば、心の働きが無から生じる不合理を認めることになるからである。神に関しても、われわれは唯、無から生じた現存の宇宙に刻み込まれた数々の極微の微調整を見、かつ知ることによってはじめて、神の存在／非存在について、思いを巡らし得るだけである。

宇宙の創生であるビッグバンそれ自体は、全くランダムに生じた、純粋に物理的事件であるはずである。にも拘らず、137億年の宇宙の経過には、生命を生むための信じがたいほどの一貫性と、確率論をはるかに超越した「微調整」が認められるのは、何故なのであろうか。

たとえば、ビッグバンの初期膨張速度が10億分の一でも速ければ、宇宙は一瞬にして希薄な気体と化していたし、10億分の一遅ければ瞬時にして崩壊していたという。この極微の間隙のうちに宇宙は成立した。そして今も宇宙が拡散もせず、凝縮もせず、フラットな状態を維持しているためには、30個以上の宇宙定数、物理定数が、極微の値で調整されていることが必要であるという。それが偶然の所産であるとは、到底考えられない。ある科学者の計算によると、このような宇宙の実現には、10の123乗を10の冪とした数の中から、その一個を選ぶほどの確率であり、ランダムにそれを選ぶのに必要な時間は、10の80乗を10の冪とした年数という数値になるという。宇宙はただ盲目のランダムな遊びで、それをなし得たのだろうか。

電磁場と重力の強度関係がわずかでも違っていたら、太陽のような安定した恒星はできず、惑星上に生命が進化することもなかった。また水素、ヘリウムの軽元素はビッグバンによって生まれたが、生命の誕生に必要な炭素、酸素、窒素などの重元素には、星の内部における核融合と超新星爆発の繰り返しによる、宇宙空間への放出が必要である。人間の誕生に100億年の準備時間が必要であったゆえんである。

さらに地球上における生命の誕生に関する確率も、

尋常ではない。生命の材料となるタンパク質の合成と生命情報をつかさどる遺伝子の問題である。生命活動に必要なタンパク質は、ほぼ100個のアミノ酸が秩序だつてつながる必要があるが、20種類のアミノ酸がL型アミノ酸のみを選んで秩序正しく並び、100個のアミノ酸がすべて目的どおりに並んでタンパク質をつくる確率は、10の160乗分の1という、これもあり得ない数字になる。

さらに生命情報をもつ遺伝子は1個のDNAの中に、A、T、C、G 4種類の化学物質の配列によってできる30億対の化学文字を持つというが、わずか2000億分の1gの中に、百科事典3000冊分相当の膨大な情報を、自然が偶然に書き込めるであろうか。

以上、ビッグバンから生命の誕生にいたるまでの経過を顧みて、その間の数々の極微の微調整については驚嘆のほかはないが、最も驚くべきことは、宇宙がビッグバンの時点で、140億年後に起こるべきことを、なぜかくも正確に予期し、計画できたのか。そして、“唯一回の”一撃のビッグバンによって、すべてを完成させ得たのか、ということである。

上に述べたとおり、われわれは心や重力の働きを知ることは出来ても、心そのもの、重力場そのものを知る術はない。まして神について、その存在の有無はわれわれ人類の知性を超越し、永遠に不可知にとどまるであろう。唯、宇宙や生命の現存を支える、奇跡的な数値の微調整の数々を知ることによって、その事の不思議を沈思し、驚嘆し、畏怖し、時にまた感謝を覚えるだけである。

(12)

最後にベルグソンの大きな課題でもあった心霊研究と死後生の問題に移ろう。古来、古今東西に枚挙にいとまのない膨大な数の幽霊体験、心霊現象、神秘体験でありながら、唯物論科学によって否定され排除され無視され続けた霊魂不死や死者との交信の問題であるが、今新しい科学的知見の光のもとで、検証されようとしていることは極めて興味深い。

医学の蘇生術の進歩も手伝って近年、頓に多いのが「臨死体験」の報告である。それに伴って、前世記憶や転生や、体外離脱といった体験の証言収集が増え、またラジオ、テレビ、電話、コンピューターなどの電子機器を用いた、「死後コミュニケーション」(ADC)の実験が、欧米の大学や研究所の真摯な科学者たちにより行われている。

すなわち、「宇宙のすべてのものは、非局在的に結びついている」という量子論の基本概念に照らせば、特に肉体への依存も介在も必要としない意識に関しては、もはや生者、死者の区別はないはずである。生者どうしにテレパシーや遠隔伝達やシンクロニシティが働くごとく、生者と死者の間にも、生と死を超えた交信が成り立つとしても、なんら不思議ではない。米国の精神療法医ポトキンらの実験では、ADCに同意した3000名の被験者の98%がADCを引き起こした、と報告されているが、このような報告を泉下のベルクソンはどのように聞くことであろう。

意識は脳に付随したものである、という既成観念にたつ限り、死後の意識活動は認められない。しかし臨死体験者の、臨床的には「死」を意味する脳波の水平状態の患者が、その間にも明瞭で現実感のある意識を経験したという証言や、また、体外離脱時の意識と脳との分離を考えると、意識は必ずしも100%脳に付随したものではないことは明白である。脳に付属する生物体レベルの意識のあることも事実であるが、一方、脳に付属しない量子論レベルの意識もあるのであろう。その場合、霊魂、魂と呼ばれる類の意識は、肉体の存在／消滅に関わらず、生存時とは異なった波動関数(周波数)の中で、さらなる新しい形での生を続けるのであろう。それが肉体を持たない点では「死」と呼ぶか、意識を持ち、記憶の継続を保持する点で、魂の不死と考えるかは、議論の分かれるところではある。

いずれにしろ量子論的に、もし意識が脳に付随するものでないとするならば、人の生死に関してもはや、肉体の有無は問題にならない。個人の精神や意識や感情は、生前と死後との間に断絶はなく、一貫性を維持するはずである。なぜならば、そこでの意識は、三次元世界を超えた、不生不滅の量子論的プロセスに属する事象であるからである。むしろ、生前には肉体という局在的、物理的制約により阻害されていた思念や心情が、死による肉体からの解放により、一層自由にその思いを羽ばたかせ、生前の念願や思いを実現していく例は少なくない。

生と死を断絶して考え死を悲しむのは、人間の感覚からして当然である。しかし、さなぎから羽化した美しい蝶を見ると、ひとはさなぎの死を悲しむだろうか。たわわに実った果実を前にして、萎み散った花を惜しむであろうか。自然の中の死は、新たな生命への出発であり、延長であり、それゆえに祝福されてしかるべきである。人間以外の生物には、自然死に対する恐怖がないというが、死の彼方を垣間見た臨死体験者

の多くが蘇生後には、もはや死を恐れるものとは思わず、死生達観の心境になることは、興味深いことである。

本来は、宗教が明らかにすべき「死」の問題が、ベルクソンの期待したとおり、科学的実験によって、新しい解明の光を受けつつあることは、皮肉と言わざるを得ない。

にも拘らず、現代文明社会にとっては、「死後生」、「死後交信」、「心霊現象」などの問題が、依然としてタブーか、無関心事項にとどまるのは何故か。

その理由は、1) 旧来のニュートン物理学の墨守であり、2) 既存の伝統的宗教からの抵抗であり、3) 一般庶民の保守的性格である。1) については、400年の「科学的常識」と狭い「再現性」の鉄則への固執があり、そのような科学者に、ガリレオに地動説を撤回させた宗教裁判を批判する資格はない。自らが新しい宗教裁判を開いているからである。2) については、宗教教団が定める教義、経典との抵触は、教団体制の権威の維持への大きな障害となる。魂の不死を説く宗教でありながら、不死の事実の科学的検証には関心を示そうとしないことは、それが単なる現世集団であることの証しである。そして、3) については、一般庶民の保守性がある。彼らの関心は真理の探究ではない。常に慣習と世間的常識の壁に守られて安寧であればいいとする、ここにも無関心の理由がある。

(結び)

ロゴスの思考に従えば、無機で機械的宇宙の中に、愛や善意や目的や意味などの倫理的価値を見出す可能性は微塵もないことは明らかである。たとえ素粒子に人間の愛や心にも似た性質があるとしても、何の根拠もない偶然の現象であって、それを根拠に宇宙の意味や目的を類推することは、ロマン小説の題材ではあっても、学問科学の対象ではないと、一蹴されることであろう。その根拠とするところは、一にかかって、「存在」(Sein) から「当為(あるべきこと)」(Sollen) は生まれぬという、ロゴス思考独自の論理であり、それはまた、われわれを長く躰かせてきた論理でもあった。

水が酸素と水素の化合物であることも、1気圧下100度で沸騰することも、善悪や美醜に関係がないのは事実である。しかし、宇宙創生の瞬間から人類の誕生までに、宇宙論、進化論、生命論などの科学者が示すあらゆる指数において、われわれは確率論を超えた、極微

にいたるまでの数多くの「微調整」を見てきた。そしてその微調整のゆえに、すべての「現在ある状態」(Sein) がささえられ、可能ならしめられていることも知った。逆に言えば、Sollenがなければ、Seinそのものはなかったのである。

それ故に、その「現にある状態」(Sein)こそが、すべてのものの「あるべき状態」(Sollen)を示唆し、その中に包含されているのである。現在ある姿で現存することは、ただに偶然の所産ではなく、その裏に計り知れぬ計画、目的、意図があり、「あるべきが故に、しかある」ことを意味するものである。われわれは、そのように考えることによってはじめて、ロゴスの論理の陥穽から解放されるのである。

かく考えることは「理性の使徒」である「科学者」にとっては明らかな職務違反である。しかし科学者が、人間には理性のみならず、なぜに想像力や直観や感性や感動と感謝の念が賦与されているかに思いを巡らすとき、彼は、科学者であることが人間のごく小さい範囲の一部分にすぎないことに気付くはずである。それは、物理学者が家庭においても微分方程式たる妻と、微分方程式たる食事を共にするか、生きた妻が作る暖かい料理をとるかの問題でもある。

さて宇宙はただ漫然と、ランダムな偶然の遊びを続けてきたのではなく、厳然たる「あるべき価値と目的と意味がある」ことを示しているのではないだろうか。そこに示されている宇宙の目的と意味とは何かと問われても、矮小なわれわれにその答えはない。ただ、宇宙創成から生命進化にいたるまでのあらゆる局面に秘められた、一貫したテーマ、すなわち「全宇宙の進化のプログラム」と答えるしかないが、今こそわれわれはロゴス文明の生んだニヒリズムの悪夢に目覚め、分離、分断、孤立、対立、競争の愚に気づき、量子論の示す「宇宙の万物は相互に結びついている」という、全一性の故郷に帰るべき時である。さもなくば、われわれの文明に明日はないであろう。

本稿は、NHK神戸文化センターにおける哲学講座の内容をまとめたものであり、紙幅の関係で、引用文献や注などをすべて割愛した。なお、筆者の乏しい量子論関係の知見について、アーヴィン・ラズロ氏の著作に多くを学んだことを記して感謝する。